

いもち病や稲こうじ病の防除対策について

水稻の穂いもちや稲こうじ病は、発生すると収量や品質に大きく影響を及ぼし、減収に繋がりますので特に注意が必要です。穂いもちの発生は出穂前後の降雨と葉いもちの発生状況と関係があり、稲こうじ病は穂ばらみ期の降雨が大きく関係するとされています。7月4日発表の気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多い確率がともに40%と予想されており、注意が必要です。

7月上中旬には「あきたこまち」が、また、7月中旬～8月上旬には「コシヒカリ」の出穂期になりますので、過去に穂いもちによる減収が発生した水田、また、過去に稲こうじ病の発病が多かった水田などでは、下記を参考に防除を行ってください。

1. いもち病

穂いもちの主な伝染源は葉いもちの病斑（右写真：病害虫防除所）で、止葉以下3葉目までに病斑がある場合には、特に注意が必要です。現在葉いもちが発生していて、出穂前～出穂以降の天候が不順と予想される場合は、出穂期前に予め薬剤防除する必要があります。



表1 水稻 穂いもちの主な防除薬剤

(令和6年7月9日現在)

薬 剤 名	希釈倍数または施用量	使用時期 / 使用回数	分 類
ブラシンフロアブル	1,000 倍	収穫 7 日前まで / 2 回以内	U14 と 16.1
オリゼメート粒剤	3～4kg / 10a	出穂 3～4 週間前 (収穫 14 日前まで) / 2 回以内	P02
コラトップジャンボP	小包装 (パック) 10～13 個 (500～650 g) / 10a 投入	出穂 30 日前～5 日前まで / 2 回以内	16.1
ゴウケツ粒剤	3～4 kg / 10a (湛水散布)	出穂 5 日前まで (収穫 30 日前まで) / 1 回	16.3
フジワン粒剤	3～5kg / 10a (湛水散布)	出穂 10～30 日前 (収穫 30 日前まで) / 2 回以内	6
ルーチン粒剤	1kg / 10a (湛水散布)	収穫 30 日前まで / 2 回以内	P03

注1) パックや粒剤は、水田が水深 3 cm 以上で均一に散布し、3～4 日は湛水状態を保ち、散布後一週間は落水、かけ流しを避けてください。
注2) 表1および2の分類欄には、FRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

2. 稲こうじ病

伝染源は前年の被害稲にできた厚膜孢子（耐久性の高い孢子）あるいは菌核とされています。被害残渣や土壌上で越冬したものが発芽し、飛散して穂ばらみ期頃にイネに感染するとされており（詳細については不明な点が多い）、この時期に降雨が多くて気温が低めだと多発生する傾向があります。

本病が発生すると登熟歩合の減少や千粒重の低下、青米などの増加がみられ、等級の低下や規格外となって、経済的損失となります。特に、採種用水田においては、防除を徹底して発病を防ぐ必要があります。



稲の病徴

<防除対策のポイント>

- 窒素の過剰施用や遅い追肥は、発生を助長するため、適正な肥培管理に努めます。
- 薬剤防除は、出穂 20～10 日前が防除適期です。防除適期を過ぎると効果の低下や薬害発生が懸念されますので、幼穂を確認するなどして、適期防除に心がけましょう。
- 収穫期に発病稲が観察されたら、可能な限り取り除き、健全稲に混入させないようにします。また、収穫作業は稲が十分乾燥してから行い、発病田と無発病田の作業を分けて行うなど、選別や混入防止を徹底しましょう。

表2 水稻 稲こうじ病の主な防除薬剤

(令和6年7月9日現在)

薬 剤 名	希釈倍数または施用量	使用時期 / 使用回数	分類
ドイツボルドーA	2,000 倍	出穂 10 日前まで / ー	M01
Zボルドー粉剤DL	3～4kg / 10a	出穂 10 日前まで / ー	M01
トップジンMソル	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内	1
モンガリット粒剤	3～4kg / 10a (湛水散布)	収穫 30 日前まで / 2 回以内	3

注) 上記表1の注意事項を守ります。モンガリット粒剤の収穫前日数が長いので注意してください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。